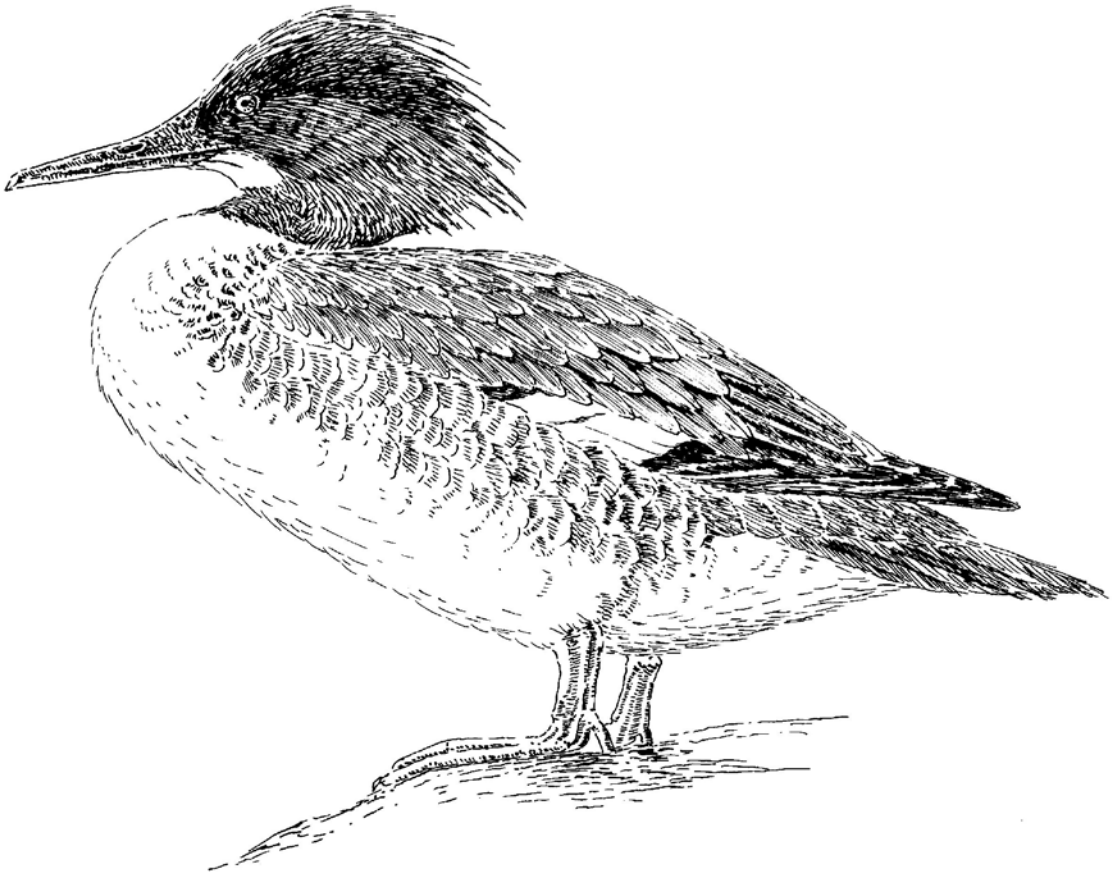
しぶき



第 112 号

2022 年 3 月
日本野鳥の会三重
http://miebird.org/

2021 年　秋にきた大群のナベヅル

玉城町　西村 泉

最初にナベヅルが目撃されたのは、2021 年 11 月 16 日。濱口雅也さんが、伊勢市内の上空を飛ぶ 6 羽を撮影しました。その 3 日後の 11 月 19 日 15 時 30 分頃、中西まほさんが同市内でナベヅル 26 羽を撮影、内陸方向から飛んできて地上に降り、初めてねぐら入りが確認されました。

その後、今井光昌さんが 11 月 20 日松阪市で 13 羽（幼鳥 2)、23 日多気郡で 14 羽、25 日松阪市で 28 羽（幼鳥 2）計 3 回ナベヅルの群れを見ました。目撃した 3 回のうちの 2 回､群れの中に幼鳥 2 羽が交ざっていたことから、今井さんは同じ群れではないかと推察しました。また 26 日 16 時頃、再び中西まほさんが編隊飛行するナベヅルを見つけ、今度は 2 羽増えて 28 羽がねぐら入りする様子を撮影しました。その他、志摩市で 2 羽、鳥羽市で 3 羽 (幼鳥 1) が目撃されています。

合計 48 羽と確認されたナベヅル　撮影：濱屋 勝則

ようやく全体の羽数が把握できたのは、11 月 27 日～ 28 日。27 日 11 時頃、中村悦子さんら少数の会員が、多気郡で 28 羽（幼鳥 3）の群れを見ました。同日午後に今井さんが、松阪市で 20 羽（幼鳥 2）の群れを確認しました。つまり二つの群れで、合計 48 羽 (幼鳥 5) のナベヅルがいることが分かりました。

目次

2021 年　秋にきた大群のナベヅル ---------- 2
表紙の言葉---------- 2
伊勢の地にナベヅル来る ---------- 4
ナベヅルについて ---------- 5
登山と野鳥---------- 7
ほのぼの鳥さん Watching---------- 8
シギ・チドリ類の年齢・季節による羽衣の変化
　―連載第 27 回 イカルチドリとコチドリ― ------10
カモの翼----------15
能登半島七ツ島大島でのドブネズミ駆除。 ---------16
2022 年ガンカモ調査終わる ----------16
サシバの繁殖----------17
野鳥記録----------18
インターネット上の会員専用サービス----------22
事務局だより ----------23
理事会報告----------24
探鳥会報告（2021 年 11 月～ 2022 年 1 月）--------24
お詫びと訂正 ----------28
編集後記----------28

表紙の言葉

ウミアイサ

津市　平井 正志

ボサボサの頭、細いくちばし。メスの頭は茶色味を帯び、体は灰色。

アイサはカモとウの間という意味らしい。魚食性。ふだんは沖合にいて、岸に近づくことは少ない。しかし、安濃川河口は魚が豊富なのかウミアイサが時々入り込む。岸に上がって休む鳥もいる。あまり、群にはならない。近縁のカワアイサやミコアイサは北海道で繁殖するものもあるが、ウミアイサは全くの冬鳥である。

ペン画は薮内正幸の絵に惹かれて描き出した。白と黒だけで、中間はなく、かつ線だけであり、表現が難しい。ヨーロッパではペンで、人物、建物や船を描いた伝統があり、その表現は版画の技法、エッチングやドライポイントに繋がり、多くの人々が手軽に鑑賞できるようになる。

翌日 11 月 28 日には、伊勢市内で 46 羽 (幼鳥 5) の大群が、地上でエサをついばむ姿が会員らによって観察されました。そして一度に 48 羽が確認されたのは、12 月 19 日ねぐら立ちのときでした。ねぐらをとっていたナベヅルは、6 時 50 分に飛び立ち編隊を組んでエサ場へと向かいました。

中西章さんは、その編隊飛行する光景を撮影し改めて 48 羽であることを確認しました。

雪山をバックに飛ぶナベツル　撮影：濱屋 勝則

12 月 20 日、ナベヅルがねぐらにしている場所に自衛隊のヘリが飛んできて、空中で停止飛行 (ホバリング) の訓練を始めました。世古口有司さんによると、そこにいたナベヅルはパニック状態だったそうです。世古口さんは、その日のうちに陸上自衛隊明野駐屯地へ通報しました。翌日、当会からも「ナベヅルがいるので飛行は自粛してほしい」と申し入れたところ、即日当会の要望を受け入れていただきました。

ねぐら立ちは、毎日 6 時 40 分から 7 時 00 分とほぼ同時刻ですが、ねぐら入りの時刻はまちまちです。それは、エサ場でうまくエサが採れるかどうかで変わってくるようです。11 月のエサ場は伊勢市や多気郡でしたが、その後エサ場にナベヅルが現れなくなりました。そこで、新しいエサ場を手分けして捜索したところ、12 月 29 日濵屋勝則さんが、松阪市で採餌中のナベヅルを見つけました。

この時期になると大半の水田が耕(すき)され、ナベヅルのエサである二番穂は土の中に鋤き込まれてしまいます。多くのナベヅルが十分なエサを確保するには、エサ場を転々と移動する必要があります。おもなエサ場は農耕地なので、農家の人がきて農機具 (トラクターなど) を使って作業をします。また、ナベヅルに接近して撮影しようとカメラを担いでやってくる人もいます。さらに、ハヤブサなどの猛禽が飛んでくることも。そのたびに警戒心の強いナベツルは一斉に飛び上がり、一旦飛んでしまうとなかなか下に降りてきません。しばらくして別の場所へ降りることもあれば、30 分以上も高い上空を飛び続け、そのままねぐら場所に戻ってしまうことも少なくありません。今までで一番早いねぐら入りの時刻は 11 時 10 分、遅いねぐら入りの時刻は 17 時 30 分頃でした。

ナベヅルの越冬には、安全･安心なねぐら場所と、やはり安全で安心してエサが採れる豊かな土地が不可欠です。ナベヅルがこの地方に来て 3 か月、いつ北帰行するか気がかりですが、48 羽が無事に冬を越し大陸の繁殖地へと旅立ってほしいものです。そして、来シーズンも再び来てくれることを願っています。

今回、松阪地区、南勢地区の会員のご協力を得たおかげで、ナベヅルの暮らしぶりが明らかになりました。また、ナベヅルのねぐら場所については、陸上自衛隊明野駐屯地よりご配慮いただきました。
そして地域の皆様には温かく見守っていただきました。厚くお礼申し上げます。
※諸般の事情により、詳細な地名などは省きました。

エサ場に舞い降りるナベツル　撮影：濱屋 勝則

ナベツルの採餌　撮影：濱屋 勝則

伊勢の地にナベヅル来る

伊勢市　中村 悦子

昨冬２月初旬にナベヅルを見ましたが、この冬は私の住まいの近くの田んぼに来てくれました。数年前にも来たことがあるようですが私は知りませんでした。私が見たのは 11 月下旬です。

鹿児島県出水市への探鳥ツアーで展望台から、マナヅル、クロヅル、ナベヅルなどの大群を見たことはありますが、近くからナベヅルだけを見たのは初めてです。見る場所を変えると、望遠鏡からですが足元までよく見えました。二番穂（ひこばえ）を一生懸命食べているようでした。

次の日は場所を変えて数も増えていました。地元に来てくれるのはうれしいものです。わりと近くから見ることができて、幼鳥は頭が黄褐色をしているのでよくわかりました。暖かくなって北へ変えるころには立派な成鳥になるでしょう。お昼前には飛び立って行きましたが、私の真上をゆっくりと羽ばたく群れに感動しました。

別の日の朝に大きな群れがあちらへ行ったりこちらへ戻ってきたりしていて、何か変だなと思い、元いた場所を見に行くと畦の草刈り作業をしていました。いま各所で田起こしがされているので二番穂が残っている田んぼは少なくなってきています。もうここへは来ないかも・・・。もう少しいてほしかったのに残念です。

そして令和４年元日の朝、私は初日の出を見ようと地元漁港の堤防にいました。しかし雲が多くて拝めそうにありません。帰る人もあります。そのとき日の出方向から黒い塊がこちらに向かって飛んで来るのが見えました。私はこれは絶対ナベヅルにちがいないと思い双眼鏡で見続けました。きれいな隊列を組んでいました。初日の出は見られませんでしたが良いお正月を迎えることができて幸せです。

まだ伊勢近辺にいてくれそうなので、時々時間の取れる時に見に行きたいですし、次の冬にもまた来てねと願うばかりです。

ナベヅルについて

津市　平井 正志

繁殖地

ナベヅル (*Grus monacha*) は東アジアに生息するツルであり、ヨーロッパや北アメリカには生息しない。繁殖についてはもっとも知られていない種である。繁殖地は、ユーラシア大陸東部である。レナ川流域の北緯 66 度以南の、湿地に分散して繁殖しており、繁殖状況の詳細は不明である（図 1)。また、アムール川流域や沿海州までのロシア領で繁殖するとされている Degtyarev (2020)。一方、出水で越冬中のナベヅルに発信機を着け、衛星追跡した研究によると、ナベヅルは朝鮮半島を縦断し、中国東北部を通り、アムール川下流域北岸（49 51'N, 132 50' E　および　53 34' N, 135 54' E）に達しており、そこが繁殖地と推定された（Higuchi *et al.* 1992）（図 1、A および B)。

別の研究ではロシア　モンゴル国境の Daursky 自然保護区でも換羽中で飛ぶ能力を失っているナベヅルを捕獲しており、近隣に営巣地があると考えられる（Harris *et al*. 2000）（図 1,D)。また、中国 黒龍江省小興安嶺でも 1993 年に繁殖が発見されている（図 1C)。さらに、モンゴル北部でも繁殖の可能性がある。

ナベヅルは湿地で繁殖すると考えられるが、繁殖地の最近の状況はあまり明らかにされていない。農地開発が進んで、繁殖地の湿地が減少している可能性もあり、また、温暖化の影響による湿地の変化も懸念される。

越冬

ナベヅルの越冬地は日本、韓国、中国である。日本では鹿児島県出水（いずみ）市で毎年越冬する。出水では古くから保護されており、越冬数も 1936 年から第二次大戦での中断はあるものの、毎年調査されている。近年増加傾向にあり、最近では 14,000 羽から 15,000 羽である（著者不詳 2015)。すなわち、全世界に生息する個体のほとんどが出水で越冬するという状態である。

一方、中国では鄱陽湖など揚子江中流域で越冬するが（Harris et al. 2000)、中国や韓国での越冬地の状況についての情報を得ることができなかった。出水ではナベヅルと同時にマナヅル (*G. vipio*) が 1,300 羽ほど、他にカナダヅル (*G. canadensis*) やクロヅル (*G. grus*) が少数越冬している。出水では給餌が行われているが、給餌場所以外では稲の二番穂を食べているようである。

出水以外では山口県周南市八代（やしろ）で以前からナベヅルが越冬しているが、最近はごく少数の個体しか見られない。2021 年 12 月の時点で 9 羽であったという。その他、西日本各地に飛来し、時には越冬するが、恒常的な越冬地は出水、八代以外にはない。地域によっては越冬誘致を試みているが、現在のところ、成功していない。

図 1. ナベヅル繁殖地

三重県での記録

三重県で活躍した鳥類学者、橋本太郎は彼の著書にナベヅルを全く記載していない（橋本 1980）、また1987 年刊行の「三重県における鳥類分布・生息に関する調査報告書」にも記載がないので（著者不詳 1987）、古くからナベヅルが飛来していたわけではなさそうである。1990 年代にはいくつかのナベヅル記録があるとされているが、現時点では確認できない。確実な記録としては 2003 年 3 月に三雲町曽原新田で久住勝司により 1 羽が記録されている（久住 2003）。それ以降、1 羽ないし数羽が飛来し、時に越冬したようであるが、越冬の記録は明らかでない (小坂 2007)。2008 年 11 月には楠町に 11 羽が飛来し、後に伊勢市豊浜に移動し、越冬かと思われたが 12 月末にいなくなり、翌 2009 年 1 月に再来したものの越冬はしなかった（林　2009）。さらに、2011 年 11 月から 2 羽が松阪市付近で越冬し、翌 2012 年 2 月 27 日に北帰したことが、確認されている（平井　2012）。また 2020 年 12 月から津市・松阪市の沿海部で 4 羽が越冬し、翌 2021 年 3 月 3 日まで滞在した（吉崎　2021）。以上以外にも県南部や鳥羽などでも目撃、滞在の記録がある。

食性など

このツルは雑食性で、トカゲやカエル、ドジョウ、タニシなどの動物や草の葉、根、種子、穀粒など何でも食べるようであるが、越冬期には穀粒などの植物が多いであろう。

今回の三重での観察では稲の二番穂をついばんでいるようである。ユーラシア大陸西部、ヨーロッパに広く分布するクロヅルとは同属、近縁であり、稀に雑種ができる。出水にも雑種が数羽飛来する。両種の繁殖地は一部重複しているのであろう。

鳥インフルエンザの影響と越冬地の分散

2021 年 12 月、イスラエルではクロヅルが鳥インフルエンザによって、大量死している。死亡したのは 5,000 羽とされている (著者不詳 2021)。イスラエルは年間 50 万羽のツルが渡りで通過し、うち 3 万羽が越冬するという。日本でも以前に出水でインフルエンザによる死亡例があり、2014 年から 2015 年の冬季にはナベヅル 4 羽が、2016 年から 2017 年の冬季には 23 羽が死亡している。同時にマナヅルも少数羽死亡している。これらの冬の場合には 1 万羽以上いるナベツルのうち被害はごく一部にとどまったようである（著者不詳 2018）。

しかし、今後の鳥インフルエンザによる影響は予測できない部分があり、大量死が将来起きる可能性は払拭できない。大量死の危険を分散させるためにも、日本でのナベヅル越冬地の分散は喫緊の課題であろう。三重県は恒常的な越冬地となる条件を備えていると思われる。そのためには住民、特に採餌地域の農家の理解と協力が不可欠であろう。また、バードウォッチャーの側もナベヅルにむやみに近づかないなどの十分な配慮が不可欠である。

引用文献

Degtyarev, V. G. (2020) Identification of the Breeding Range of the Hooded Crane. Ornith. Sci. 19:15-27.

J. Harris, S. Liying, H. Higuchi, M. Ueta, Z. Zhengwang, Z. Yamyun and N. Xijun　(2000)　Migratory stopover and wintering locations in eastern China used by White-naped Cranes Grus vipio and Hooded Cranes G. monacha as determined by satellite tracking. Forktail 16 (2000): 93-99.

H. Higuchil, K. Ozaki, G. Fujita,M. Soma, N. Kanmuri,and M. Ueta (1992) Satellite tracking of the migration routes of cranes from southern Japan. Strix 11:1-20

久住勝司　(2003) しろちどり 39 号　17 ページ

小坂里香　(2007) しろちどり 53 号　26 ページ

橋本太郎　1980「三重県鳥類の分布と生態」 橋本太郎、伊勢

林益夫　　(2009) しろちどり 60 号　2 ページ

平井正志　（2012）ナベヅルの越冬　しろちどり 70　3-6

吉崎幸一　（2021）しろちどり 109 号　21p

著者不詳　1987 「三重県における鳥類分布・生息に関する調査報告書」三重県農林水産部林業事務局緑化推進課 , 津

著者不詳　2015　年度別ツル渡来数
https://www.city.kagoshima-izumi.lg.jp/page/page_80092.html
2022/1/24 閲覧

著者不詳　2018 出水市のツルにおける高病原性鳥インフルエンザの発生について
https://www.pref.kagoshima.jp/ag07/sangyo-rodo/nogyo/tikusan/eisei/26hpai.html
2022/1/7 閲覧

著者不詳 2021 Thousands of cranes killed by bird flu in 'worst blow to wildlife' in Israel's history
https://edition.cnn.com/2021/12/28/middleeast/israel-cranes-bird-flu-intl/index.html　2022/1/7 閲覧

著者不詳　年次不詳　白頭鶴（中文）
https://zh.wikipedia.org/wiki/%E7%99%BD%E5%A4%B4%E9%B9%A4　2022/1/7 閲覧